

# 国土交通大臣 認定工法 >>>



## テコットパイル工法



先端地盤：砂質地盤（礫質地盤を含む）  
認定番号：TACP-0355

### 認定範囲

- ＝ 支持地盤 ＝  
砂質地盤  
(礫質地盤を含む)
- ＝ 試験方法 ＝  
標準貫入試験
- ＝ 先端N値 ＝  
砂質・礫質地盤  
( $4 \leq N \text{値} \leq 50$ )

#### 鋼管の寸法

$\phi 101.6 \sim \phi 267.4$

#### 拡径径の寸法

$\phi 250 \sim \phi 650$

#### 最大施工深さ

130D以下かつ34.7m以下

適用する建築物の規模  
延べ床面積の合計が  
50,000㎡以下の建築物

## テコットパイル工法



先端地盤：粘土質地盤  
認定番号：TACP-0356

### 認定範囲

- ＝ 支持地盤 ＝  
粘土質地盤
- ＝ 試験方法 ＝  
標準貫入試験
- ＝ 先端N値 ＝  
粘土質地盤  
( $4 \leq N \text{値} \leq 50$ )

#### 鋼管の寸法

$\phi 101.6 \sim \phi 267.4$

#### 拡径径の寸法

$\phi 250 \sim \phi 650$

#### 最大施工深さ

130D以下かつ34.7m以下

適用する建築物の規模  
延べ床面積の合計が  
50,000㎡以下の建築物

# 建築技術性能証明 取得工法 >>>



## テコットパイルSR工法



先端地盤：砂質土地盤（礫質地盤を含む）  
GBRC 性能証明 第10-08号

### 性能証明判定

- ＝ 支持地盤 ＝  
砂質地盤  
(礫質地盤を含む)
- ＝ 試験方法 ＝  
スウェーデン式  
サウンディング試験  
ラムサウンディング試験
- ＝ 先端N値 ＝  
 $4 \leq N \text{値} \leq 20$

#### 鋼管の寸法

$\phi 101.6 \sim \phi 165.2, 100 \times 100$

#### 拡径径の寸法

$\phi 250 \sim \phi 400$

#### 最大施工深さ

130D以下かつ14.5m以下

適用する建築物の規模  
延べ床面積の合計が  
500㎡以下の建築物

## テコットパイルSR工法



先端地盤：粘性土地盤  
GBRC 性能証明 第10-08号

### 性能証明判定

- ＝ 支持地盤 ＝  
粘性土地盤
- ＝ 試験方法 ＝  
スウェーデン式  
サウンディング試験  
ラムサウンディング試験
- ＝ 先端N値 ＝  
 $4 \leq N \text{値} \leq 20$

#### 鋼管の寸法

$\phi 101.6 \sim \phi 165.2, 100 \times 100$

#### 拡径径の寸法

$\phi 250 \sim \phi 400$

#### 最大施工深さ

130D以下かつ14.5m以下

適用する建築物の規模  
延べ床面積の合計が  
500㎡以下の建築物

## 杭材の腐食について

鋼管杭の腐食については、建築分野における通常の場合、鋼管の外側 1mm を腐食しうるとして考慮すればよいとされています。

### 鋼材の腐食しろに関する規定

鋼管杭の腐食については、各種地盤に設置された腐食試験用L型杭に対する腐食の実測調査から、以下の事項が指摘されている。

- 1) 鋼材の腐食は実測された 10 年間にわたる年間両面腐食率も平均値を設置された条件を考慮せずに機械的に求めると 0.0106mm となる。
- 2) 全試験杭中、最大の年間両面腐食率の値は 0.0297mm である。実測された年間腐食率の標準偏差は 0.005mm であるので、腐食率の最大値は平均値 プラス 4 倍の標準偏差を超えない。
- 3) 年間の腐食率は、杭設置後の経過年数とともに減少する。これらの事項によれば、腐食しろとしては、従慣用的に用いられた 2mm を小さくすることが可能で、通常の場合は杭の外側 1mm を腐食しうるとして考慮すればよい。この値は、平均値プラス 2 倍の標準偏差の値、0.02mm の年間両面腐食率を設定し、腐食が杭の設置後の経過年数によらず一様な速さで進むとした場合、50 年経過した後の腐食しろの値である。ここでの腐食率は、鋼杭の両面の腐食の和を示しているが、ここでは安全側の評価を行う事とし、鋼管杭の外側に腐食しうるとして考慮する。

日本建築センター発行「地震力に対する建築物の基礎の設計指針（平成3年）」による

※本工法は、杭状地盤補強材として使用する事も可能である。